



田村孝行 さん

19日 女川町 第1走者
「スポーツマンの息子なら走りたいと言っていたはず。自分が走らなくては」と、聖火ランナーに志願しました。

健太いのちの教室代表

表 田村さんの長男 健太さんは、震災の津波で女川町で亡くなりました。

命の大切さを伝える講演活動などで出会った皆さんへの感謝と、コロナ禍により大変な状況でも、きっと光は見えると伝えたい、という思いを胸に、健太さんの得意のガッツポーズで駆け抜けました。



井上裕貴 さん

20日 東松島市 第3走者

井上さんは、震災をきっかけに結婚をし、大崎市が第二の故郷になりました。当たり前前に家族とともに生活できることに感謝し、聖火をつなぎたい、という思いで走りました。

休日は、息子さんの

所属している少年野球チームの練習に忙しい。「自分もずっと野球をしてきた。サポートされる側から、野球を通じて、子どもたちをサポートする側になれたことに喜びを感じている」と笑顔で語ってくれました。



岩崎健弥 さん

19日 石巻市総合運動公園周辺コース 第5走者

震災の際に、岩崎さんが営む、酒造会社「寒梅酒造」の酒蔵が全壊。「たくさんの人の支援で会社を復興することができた。これまでの感謝の気持ちを込め、

聖火の火をつなぎたい」と、聖火ランナーに志願しました。「恩返しをしたい。希望の火をつなぎ、皆さんの心の支えになり、勇気づけたい」との思いを胸に駆け抜けました。

吉田澄 さん

19日 南三陸町 第12走者

吉田さんは、これまで出会った皆さんへの感謝の気持ちから、被災した地域が復興している姿を見てもらいたい、聖火ランナーを志願しました。

「ボランティアスタッフみなさんの声掛けのおかげで不安なく走れた。感謝の気持ちでいっぱい」と振り返っていました。

次は、大崎市15周年記念実行委員として、コロナ禍でも市民の交流の場ができるように努力したいと笑顔で語ってくれました。



県内最年少ランナー、鹿島台中学校2年生の後藤さんは、1,060グラムでとても小さく生まれました。「大事に育ててくれた家族と、お世話になった人たちに感謝を込めて、力強く走っている姿を見てもらいたい」と聖火ランナーを志願しました。

当日は、母親の有美さんの手作り五輪カラーのヘアアクセサリと、靴紐を身に着け、「令和元年東日本台風で被害にあった人たちに、勇気と元気を分けてあげられるよう、元気いっぱい走ろう」という思いを胸に駆け抜けました。



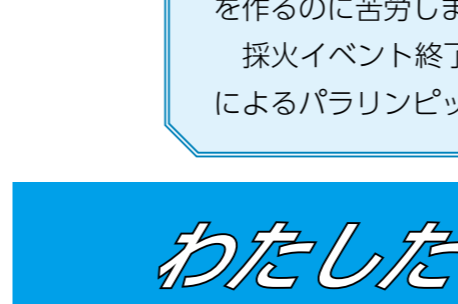
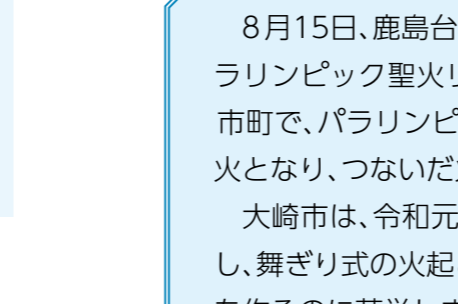
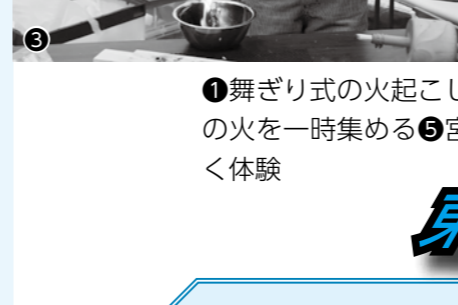
後藤美光 さん

19日 女川町 第20走者

東京2020 オリンピック 聖火リレー

6月19日から21日までの3日間、宮城県では、東京2020オリンピック聖火リレーが実施されました。

大崎市から、5人の聖火ランナーが参加し、石巻市・東松島市・南三陸町・女川町で、それぞれの思いを胸に、聖火をつなぎました。



8月16日に仙台市で実施された、パラリンピック聖火フェスティバル(宮城県)集火式では、大崎市を含む県内9市町で採火した種火を一つに集火し、「宮城県のパラリンピック聖火」として送り出しました。

①舞ざり式の火起こし器を使用し種火を作る②③種火から大きくした火を慎重にろうそくへ移す④ろうそくの火を一時集める⑤宮城県の集火式に運ばれる火を移したランタン⑥採火イベント終了後「ボッチャ」を楽しむ体験

東京2020パラリンピック聖火リレー

8月15日、鹿島台地域の鹿島台瑞・華・翠交流施設(鹿島中央野球場)において、「東京2020パラリンピック聖火リレー 大崎市採火イベント」を開催しました。宮城県内では、大崎市を含む9市町で、パラリンピックの聖火となる種火を採火し、集火された火が宮城県のパラリンピック聖火となり、つないだ火を一つにするため、東京都へ送り出しました。

大崎市は、令和元年東日本台風で被災した鹿島台地域の小学4年生以上の7人の児童が参加し、舞ざり式の火起こし器で種火をおこしました。舞ざり式での火おこしは初めての体験で、種火を作るのに苦労しましたが、みんなで諦めずに種火をおこし、大崎市の聖火を一つにしました。

採火イベント終了後は、パラリンピックの正式種目「ボッチャ」を体験し、小さなアスリート達によるパラリンピック競技に、会場では大きな歓声が上がりました。

わたしたちの 東京2020オリンピック・ パラリンピック競技大会